

国が滅びるとは

〔聖書〕列王記下23章24～27節

ヨシヤはまた口寄せ、霊媒、テラフィム、偶像、ユダの地とエルサレムに見られる憎むべきものを一掃した。こうして彼は祭司ヒルキヤが主の神殿で見つけた書に記されている律法の言葉を実行した。彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち帰った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった。しかし、マナセの引き起こした主のすべての憤りのために、主はユダに向かって燃え上がった激しい怒りの炎を収めようとなさらなかった。主は言われた。「わたしはイスラエルを退けたようにユダもわたしの前から退け、わたしが選んだこの都エルサレムも、わたしの名を置くとやったこの神殿もわたしは忌み嫌う。」

24章10～14節

そのころ、バビロンの王ネブカドネツアルの部将たちがエルサレムに攻め上って来て、この都を包囲した。部将たちが都を包囲しているところに、バビロンの王ネブカドネツアルも来た。ユダの王ヨヤキンは母、家臣、高官、宦官らと共にバビロン王の前に出て行き、バビロンの王はその治世第八年に彼を捕らえた。主が告げられたとおり、バビロンの王は主の神殿の宝物と王宮の宝物をことごとく運び出し、イスラエルの王ソロモンが主の聖所のために造った金の器をことごとく切り刻んだ。彼はエルサレムのすべての人々、すなわちすべての高官とすべての勇士一万人、それにすべての職人と鍛冶を捕囚として連れ去り、残されたのはただ国の民の中の貧しい者だけであった。

〔序〕中国に於ける反日デモ

中国各地で反日デモが続発し、日本のスーパーや日本企業の工場破壊が発生しています。原因は日本政府が尖閣諸島の地権者から権利を購入して、国有化したからでした。そもそもの発端は石原東京都知事が地権者と交渉して東京都で購入し、放置されてきた漁民の避難所施設や灯台等を整備しようとしたからです。政府は島に手を加えて中国を無用に刺激して紛争を起こさぬようにした積りでしたが、それでもこの事態になってしまいました。

自国の主権が侵されることに激しく拒否反応を示す中国。近代になって欧米日諸国に主権を侵され、最後には日本軍に全土を侵略された屈辱の歴史が、中国国民にとってどれほど深い傷跡を残したかを、あらためて見せ付けられています。

私たち夫婦がシンガポールから帰国した2005年にも、4月に中国各地の大都市で激しい反日デモが発生し、一部が暴徒化しました。あの時は小泉首相の靖国神社参拝問題と韓国竹島問題、そして日本が国連安保理事会の常任理事国になりそうになり、国際政治でも大国化することへの反感から起ったものでした。中国の若者たちは「小日本」(xiao Riben)を口々に叫びました。英語のJapと同じ軽蔑語です。今回のデモではこの言葉が聞こえませんか。日本をもう小日本とは呼べなくなったのでしょうか。

先日の朝日新聞投書欄で北京に6年駐在した方の文を読みました。「各地を訪問し多くの場所で『抗日記念館』を目にしました。雲南省の小さな村の記念館では日本軍の残虐行為について、若い係員が涙ながらに説明していました」。デモに参加した若者たちは愛国教育を受けて育ちました。丁度私たちの世代が戦時中に徹底的に皇民愛国教育を受け、お国のために戦死して靖国神社に祀られることのみを目指した姿を思い起こします。一体何時になったら、愛国心と日中友好が両立して、このような反日デモの起らない時代が来るのでしょうか。暗い思いに襲われます。

[1]戦争の悲惨さを感じる心

さて私たちは、旧約聖書のイスラエル王国時代の歴史を学んできました。紀元前 1000 年にダビデが統一王国を建てましたが、栄華に輝くソロモンの代が終わると南北に分裂し、北王国は前 722 年に滅亡、南王国も前 586 年にバビロンにより滅ぼされてしまいました。南王国の滅亡——それが今日の学びです。

ヨヤキン王は、バビロンの大軍に包囲されている危機の最中に、父ヨヤキム王が死に、18 歳で王位を継ぎました。そこで3ヶ月後に城門を開いて全面降伏したのです。そして神殿、王宮の宝物のすべてと共に、母や妻、家来、有力者の全員、軍人、兵士から職人、鍛冶等の技術者全員を捕囚の民としてバビロンへ連れて行かれました。第一次捕囚です。都には貧しい者だけが残されました。

バビロン王は、ヨヤキンに代えておじのマトンヤを王にし、名前をゼデキヤと改めさせました。名前を変えさせられるとは、それまでとは別の人格にされることです。ゼデキヤはバビロン王の意のままになる王となりました。しかし愚かにも8年後に、反旗を翻してバビロンの大軍に包囲され、2年半後に遂に落城。自分の目の前で息子たちを殺され、両眼をつぶされてバビロンに引き立てられて行き、牢獄のなかで死にました。エルサレムの神殿も王宮も焼き払われ、城壁も取り壊されてしまいました。イスラエル王国の完全な滅亡です。

NHKの朝ドラ「梅ちゃん先生」が昨日で終わりました。東京蒲田の焼け野原で空襲を生き延びた庶民が、バラック住まいから次第に暮らしを立て直して幸せになって行く戦後の復興振りが描かれていました。見ていますと戦争に負けて打ちのめされたという惨めさや厳しさが余り感じられません。確かに 67 年前の我が国の敗戦は、戦勝国から随分寛大に扱われたと言えましょう。私自身の戦争体験もこのドラマと似ていました。大空襲以前に東京から北海道に疎開して平穏な8月 15 日を迎え、翌年には東京に戻り、空襲の被害にあわなかった練馬で中学生を送ったのです。二度と戦争をしてはならないという厳しい自覚に欠けていないかと反省させられます。

それに比べて、東京や大阪、広島、長崎の大空襲、原爆の被害に直接遭われた方、沖縄の激しい地上戦の戦場に巻き込まれた方、外地で敗戦を迎え、難儀な引き揚げや抑留生活を余儀なくされた方々の苦労はどんなにか深刻なものだったことでしょうか。否、それ以上に日本軍の侵略によ

って平和な生活を破壊され、家族を殺され、悲惨のどん底を味合わされた、中国はじめアジア諸国の皆さんは、どれほど戦争を呪い、日本を呪ったことでしょうか。

私は今日の聖書箇所を読んで、国を滅ぼされた時に味合わせられる恐怖、苦痛、悲しみ、呪いに、もっともっと共感する感性を持たなければと痛感させられました。

[2]神の目によって定まる歴史

ではどうしてイスラエルの民は、このような悲劇を味合わねばならなかったのでしょうか。直接的原因は国王の無能さです。24 章1節以下をご覧ください。ヨヤキム王は三年間バビロン王に服従しましたが、その後反逆しています。当時大国エジプトと新興国バビロンにはさまれた小国として、どちらの傘の下に身を寄せるかに国の命運がかかっていた。確かに父ヨシヤ王はエジプトがバビロンと対決しようとして、南から攻め上って来た時、これを迎え打って戦死しています。

兄のヨアハズが王になりましたが、三ヶ月後にエジプト王によってエジプトに連れて行かれ、ヨヤキムが兄に代わって王に立てられました。ここまではエジプトが優勢です。しかしその後バビロン王が勢力を強大にしてエルサレムに攻めて来たので、エジプト王に貢いでいた税金をバビロン王に払うようになりました。ここで世界の覇権はエジプトからバビロンに移っています。その世界情勢を見究めることが出来ず、ヨヤキムはエジプトを頼みとして バビロンに反逆したのです。

バビロンはすぐさまエルサレムを包囲しました。しかしエジプトは最早助けに来てくれません。そして包囲されている最中に彼は死に、18 才の息子ヨヤキンが王になり、城門を開いて降伏したのです。そして第一次バビロン捕囚となりました。ところが次に王にされたゼデキヤも、バビロンに反旗を翻して、決定的に滅ぼされてしまったのです。どうして歴史に学んで世界情勢を的確に判断出来なかったのでしょうか。

良い家臣に恵まれなかったのです。日本は世界の状況を知っている海軍が、世界に無知な陸軍の暴論に押されて、無謀な戦争突入に賛成し、天皇はその決定に従って開戦の詔勅を出してしまいました。しかしユダ王国の王たちは、エレミヤのような真の預言者が居るにもかかわらず、彼を退け、偽預言者たちに惑わされました。偽預言者の典型としてハナンヤの記事が、エレミヤ 28 章に記されています。

しかし何よりも、王自身にイスラエルの歴史を通して彼らを導いて来られた主なる神を畏れ敬い、その御言葉に聞き従って、神の民の王としての責任を果たして行こうという信仰が薄かったことがあげられます。先週学んだヒゼキヤ王は偉大な預言者イザヤに聞き従いましたが、その息子マナセは主の目に悪とされる数々を行って主の怒りを招きました。「それゆえイスラエルの神、主はこう言われる。見よ、わたしはエルサレムとユダに災いをもたらす」(21:12)。

マナセの孫ヨシヤは、「彼のように全くモーセの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くして主に立ち

返った王は、彼の前にも後にも居ない」と言われるほど、宗教改革を進めましたが、「しかし、マナセの引き起こした主のすべての憤りのために、主はユダに向かって燃え上がった激しい怒りの炎を収めようとはなさらなかった」(23:26)と聖書は語っています。

国を直接滅亡させたヨヤキムもゼデキヤも「主の目に悪とされることをことごとく行った」(23:37、24:19)と記されています。主の目によって国の滅亡が決まる——人間の思惑や行動が歴史を織り上げていくように見えますが、歴史は神の御心が働く場なのですね。神さまの御心が歴史に表れていくのです。

そうならば私たちは、神さまの御心を尋ねながら、歴史に参加していかねばなりません。神の目に良いとされることを行おうとする時、私たちは真剣にみ言葉を読み、祈らなければなりません。信仰の友の助言に謙虚に耳を傾けます。自分の欲や世間の慣わしになびこうとする心と激しく戦います。礼拝を大切に、心身を整えます。こうして歴史を綴る信仰の歩みが一步一步と進められていくのです。神さまからの祝福をいただけるのです。国民の幸せを担う一国の王たる者こそ、そうでなければなりません。

[3]裁きとともに赦しと祝福を備える歴史の主

南王国が滅び、国王以下がバビロンで捕囚生活を始めました。エルサレムに残ったエレミヤは手紙を書き送っています。エレミヤ書 29 章です。

「家を建てて住み、園に果樹を植えてその実を食べなさい。妻をめとり、息子、娘をもうけ、息子には嫁をとり、娘は嫁がせて、息子、娘を産ませるように。そちらで人口を増やし、減らしてはならない。わたしが、あなたたちを捕囚として送った町の平安を求め、その町のために主に祈りなさい。その町の平安があつてこそ、あなたたちにも平安があるのだから。」(5～7節)

「主はこう言われる。バビロンに七十年の時が満ちたなら、わたしはあなたたちを顧みる。わたしは恵みの約束を果たし、あなたたちをこの地に連れ戻す。わたしは、あなたたちのために立てた計画をよく心に留めている、と主は言われる。それは平和の計画であつて、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」(10～11 節)

エレミヤは国家滅亡の悲劇を目の当たりにしながら、イスラエルを今日まで導いて来てくださった主が、ご自分の民をこのまま滅ぼし尽くしてしまわれるはずがないと確信しました。すると神さまは 70 年先の歴史を彼に見せて下さったのでした。それは捕囚の民の喜びの帰還です。先の見えない異国での捕囚生活、ともすれば絶望に押しつぶされそうになります。しかし主は希望を与える将来を示して下さったのです。「それは平和の計画である」。何と嬉しいことでしょうか。

王国の滅亡は神の民の罪に対する、神の厳しい裁きでした。しかし神さまは将来と希望を与える平和の計画をすでに用意しておられるのです。そして「あなたたちがわたしを呼び、来てわたしに

祈り求めるなら、わたしは聞く」「心を尽くしてわたしを求めるなら、わたしに会う」「わたしは捕囚の民を帰らせる」と約束して下さいました。

これこそが祝福なのですね。信仰の祝福なのですね。信仰者には絶望はありません。どんな時にも、将来と希望が与えられるのです。歴史を導く神さまは、憐れみに富み、厳しい裁きと共に、赦しを祝福を用意しておられる支配者なのです。ですから私たちは、主の御心に背いた罪を悔い改めて、主の御許に戻らなければなりません。

【結】 赦しと希望の将来

国が滅びるとは、神の激しい裁きです。神の激しい怒りの炎によります。私たちは心の底から、罪を悔い改めなければなりません。神さまは、赦しと希望の将来を既に御心の内に、備えて下さっているのです。

反日デモに心を痛めて祈っている時に、「主よ、御国を来たせたまえ」という祈りの大きな響きが聞こえてきました。そうです。神さまは既に、一億を超える同信の友を中国に備えて下さっているのです。この兄弟姉妹が、中国の各地で今日も礼拝を守り、「主よ 御国をきたせたまえ」と主の祈りを唱えて下さっているのです。何と心強いことでしょうか。

「われらに罪を犯す者をわれらが赦すごとく、われらの罪をも赦したまえ」との祈りが、中国各地で祈られているのです。赦しは必ず拡がっていくのです。私たちもこの日本国内で、主の祈りを唱える同信の友もっともっと増やしていきましょう。

完